

青鳳会資料 子宮下垂・子宮脱に対する鍼灸治療

令和 1年7月28日
青鳳会講師 吉野 久

I. 諸 言

鍼灸院に来院する婦人のなかで、時に内陰部痛を訴える患者がある。治療者が男性鍼灸師である場合には、訴え出にくい疾患だが、私が25年臨床を行ってきたなかでも3,4人の患者があったので、世間には相当数の、これに悩む婦人があるものと思われる。

当疾患に悩む患者は、当然の事ながら婦人科を受診するが、その半数は検査上、異常がないということで、治療に至っていない。しかしながら、泌尿器科を受診した場合、治療がはじまる場合がある。この理由は後ほど述べるが、この痛みが婦人科・泌尿器科の区別なく、鍼灸によって治るものであれば、大きな朗報になることは間違いない。

II. 病 態

当疾患の患者から耳にすることは、一様に内陰部(膣内側)が「剣山に刺されるように痛む」という表現である。また内陰部の疼痛とともに頻尿を訴える場合が多い。

発痛の機序としては、経年変化により子宮が下垂して、まず膣を圧迫することにより内陰部の疼痛が起る。

また同じく子宮の下垂により、膀胱が圧迫されることによって頻尿症状をおこすことになる。あるいは膀胱を後屈させることによって膣を圧迫して痛みが起ることもある。こうした際には、内診によって膀胱瘤を認める。

ひどい場合には、子宮脱となるが、さらに膀胱脱、直腸脱まで併発する場合もある。このような症状には、総称して「骨盤臓器脱」と呼ぶ

※子宮下垂を原因とする頻尿(膀胱炎)の際には、腎・膀胱に細菌は認められない。

患者に共通して言えることは、肥満していることに加えて、比較的、筋が無力質であるということである。また出産経験の多いことも、大きく影響する。

Ⅲ. 泌尿器科での治療

先に子宮下垂症状のある者は、排尿障害を訴える場合が多いと説明したが、患者側の自覚症状としては頻尿などの排尿障害として、まず自覚される。そこで自己触診や目視での臓器脱が認められる場合のほかは、多くは排尿障害を訴えて泌尿器科をおとずれることになる。婦人科よりも、泌尿器科で治療が始まる所以である。

子宮下垂を泌尿器科で治療する手段としては、骨盤臓器脱メッシュ手術法(TVM手術)がとられるようになってきた。

TVMとは「Tension-free Vaginal Mesh」の略で、骨盤臓器を力のかからない自然な位置に矯正し、その状態で支える手術である。メッシュは骨盤内臓器脱専用のポリプロピレン製メッシュが実用化され、①膣と膀胱の間、②膣と直腸の間に挿入し、アームを骨盤奥の靭帯や筋膜に貫通させて固定する。(次ページの図を参照)

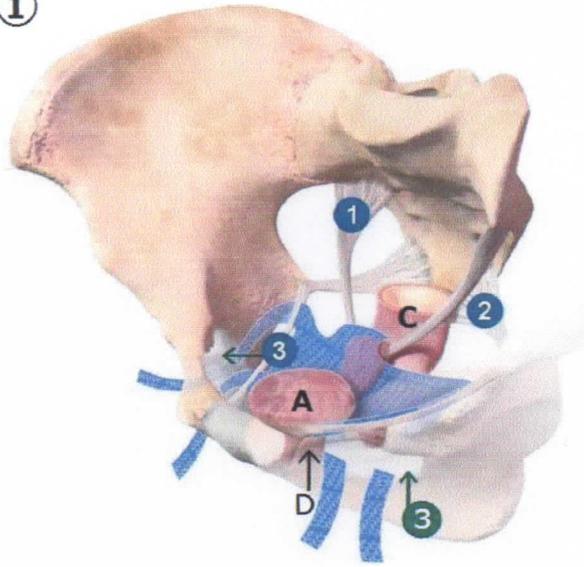
切開は膣壁以外には股部と臀部に5mm程度4～6箇所行なう。術後は約7日間で退院となる。(保険が適応、概算で23万円ぐらいの負担)

メッシュとアームの固定場所

①前壁メッシュは膀胱と膣の間に置かれ、固定部は閉鎖孔を通過して骨盤筋膜腱弓に固定される。

②後壁メッシュは膣と直腸の間に置かれ、固定部は仙棘靭帯に固定される。

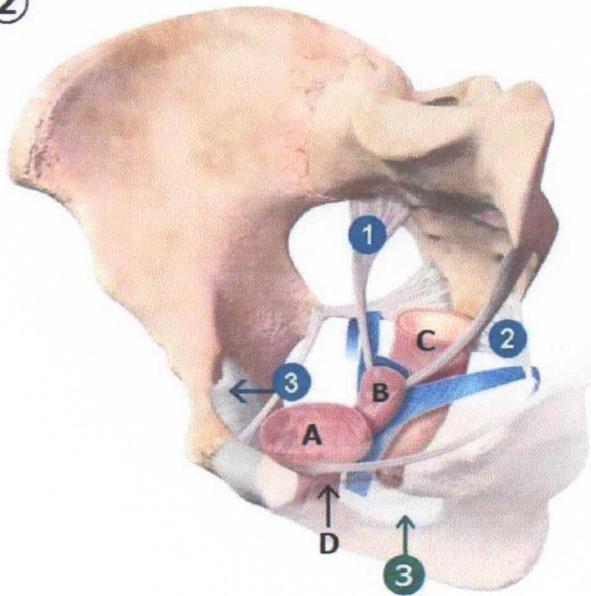
①



- 1. 仙骨子宮韌帶
- 2. 仙棘韌帶
- 3. 骨盆筋膜皺弓

- A 膀胱
- C 直腸
- D 腔

②



- 1. 仙骨子宮韌帶
- 2. 仙棘韌帶
- 3. 骨盆筋膜皺弓

- A 膀胱
- B 子宮
- C 直腸
- D 腔

IV. 鍼灸治療

鍼灸治療としては、子宮が下垂してこないよう処置することを眼目にする。

その前段階の処置として、帯脈穴などを取って身体全体をいったん緩める。この処置には身体の左右の偏りを整える意味合いもある。

次に、経外の奇穴である維胞穴※を取って、身体のゆるみを締める処置を行なう。

以上の二段構えの治療を行なうことによって、子宮脱を起こしている患者でも、子宮の膣内突出はなくなっていく。

※維胞穴： 上前腸骨棘後方から大転子へ伸びている大腿筋膜張筋上にある。大腿筋膜張筋は、患者を仰向けに寝かせて、下肢を内旋させると顕著に動く筋である。「維」は大綱、「胞」は子宮であり、まさに子宮をささえる大綱として命名された穴と思われる。現代中国の臨床経験から確認された穴である。

※発表当日、実技のモデルになった会員から、維胞穴に鍼をすると(金6番1寸6分)、骨盤底筋が引き締められるように感じるという感想があった。当該の施術をした結果、こうした感想があったことは望外の収穫だった。

【 臨床例 1 】 【 臨床例 2 】 口頭説明

青鳳会資料 子宮下垂・子宮脱に対する鍼灸治療・漢文資料

令和 一年七月二十八日

青鳳会講師 吉野 久

人間が子孫を残すということは、人間も生物である以上、必須のことである。

ことに古代では、現代のように満足に赤ん坊や子供が育つことがなかったのも、ことさらに重要視されていたことは容易に想像できる。

畢竟、女性が懐妊するということも重大事となった。また、女性を妊娠に導くために、さまざまな工夫や方法も考えられた。房中術があらわれる所以である。この範疇について、古代中国では「七損八益」と称する名のもとに、種々のことが述べられてきた。

この「七損八益」については、巷間では「女は七の倍数、男は八の倍数の年ごとに体の変化がある」という、耳触りのよいことだけが広がり、その淵源部については不問にされたままだ。古典鍼灸を学ぶ我々が、このように人口に膾炙するようなことを、同音にしてはいけいないので、子宮の病をとりあげた今回は、関連書だけでも読んでみようと思つた次第である。

しかしながら、まずは黄帝内経に著された女子胞に着目してみよう。

奇恒の府である女子胞＝子宮は、衝脈・任脈とつよく結びつけられている。衝脈は読んで字の如く、腹中から衝きあげる強さを持った脈だが、この衝き上げは、腹大動脈の動悸に他ならない。

靈樞・五音五味篇

衝脈、任脈、皆起於胞中、上循背裏、爲經絡之海。

靈樞・海論篇

衝脈者、爲十二經之海。

二十八難

任脈者起於中極之下、以上毛際、循腹裏上關元、至喉咽。

● 七損八益

さて、房中術、七損八益については、素問や靈樞に書かれる以前から、著されていた。そのひとつが馬王堆医書であるが、ここには黄帝内経に書かれる以前の原型といった形で書かれている。そして、黄帝内経以後の時代のもは、じつは日本の医心方に種々の委細が残されているのである。

まずは素問の陰陽應象大論から見てみよう。

素問 陰陽應象大論篇第五

岐伯曰く能く七損八益を知れば則ち二(陰陽)は調う可し、此れを用いるを知らざれば則ち早く衰うるの節なり。

王冰注「用いるとは房色を謂う也。女子は七七を以つて天癸の終りと爲し、丈夫は八八を以つて天癸の極みと爲す。然り八は益す可しと知れ、七は損う可しと知れ。則ち各々氣分に隨いて天真を修養してその天年を終え、以つて百歳に度らん」

素問 上古天真論第一

岐伯曰く女子は七歳にして腎氣盛んなり、齒更り、髮長し。

二七にして天癸至る、任脈通じ太衝脈盛んなり、月事時を以つて下る、故に子を有つ。

三七にして腎氣平均す、故に眞牙生えて長じ、極まる。

四七にして筋骨堅し、髮長じ極まりて、身體盛壯なり。

五七にして陽明脈衰う、面焦げ始め、髮墜ち始む。

六七にして陽脈上より衰う、面皆焦げ、髪白み始む。

七七にして任脈虚す、太衝脈衰え天癸竭く、地道通ぜず。故に形壞れて子無きなり。

丈夫は八歳にして腎氣實す、髪長びて齒更る。

二八にして腎氣盛んなり、天癸至りて精氣溢れ寫す、陰陽和すが故に能く子を有つ。

三八にして腎氣平均す、筋骨勁強なるが故に眞牙生えて長じ極む。

四八にして筋骨隆盛なり、肌肉満ちて壯ん^{さか}なり。

五八にして腎氣衰う、髪墜ち齒^か槁る。

六八にして陽氣上より衰え竭く、面焦げて髪鬢^{かみ}頒白す。

七八にして肝氣衰う、筋は動く能はず。

八八にして天癸竭く、精少なく腎藏衰え、形體皆極まれば、則ち齒髪去る。(注文誤入)腎は水を主り、五藏六府の精を受けて藏す。故に五藏盛んにして能く寫す。今五藏皆衰え、筋骨解墜し、天癸盡く。

髪鬢^{かみ}白く、身體重く、行歩も正しからず子無き耳。

馬王堆醫書 竹簡「天下至道談」

馬王堆帛書について

一九七二年四月、中国湖南省長沙市の東郊外約四宮の地点・馬王堆の台地より発掘された長沙国丞相軼候利蒼(たいこうりそう)の男子を葬つた3号墓の様々な

埋葬品の中から、十四種類の医書が発見された。これらの医書のほとんどは絹に書かれた帛書で一部が竹簡と木簡である。

この墓の主人が下葬されたのは、漢王朝の第5代目の文帝の初元12年(前168)である。したがって、これらの書の抄写年代はそれ以前であり、戦国時代から秦末漢初のもものとされる。馬王堆漢墓医書の著者は不明であり、各医書には序文も著者名も記されていないが、研究の便を考慮して各医書の内容に従って書名がつけられて、十四に分類された。

文字からいえば、篆書から隸書に変わる書体であり、秦からBC202年に漢が作られるまでの約20年間ぐらいの間に書き写されたものだろうということが、書家たちの研究によって分かってきている。

その内容について言えば、「足臂十一脈灸経」「陰陽十一脈灸経」という、経脈が靈枢にまとめられる以前の姿が記されているほか、「五十二病方」という、病氣治療の実際についての帛書などがある。

氣に八益有り、有(又)七孫(損)有り。八益を用い、七孫(損)を去ら

ざれば、則ち行年卅(四十)にして陰氣自ずから半ずるなり。

五十にして起居衰え、六十にして耳目葱(聡)明ならず。

七十にして下枯れ、上は澆(脱)し、陰氣も用いられず、涙泣(涕泣) Ⅱ

鼻水と涙(留(流)れ出ず。

これをして復^{また}び仕^{また}ならしむるの道有り、七孫(損)を去り、その病より振^{また}い、八益を用いて其の氣を貳^{また}(再起)せしむ。この故に老^{また}者も復^{また}び^{また}仕^{また}く、仕^{また}者も衰えず。

八益とは、一に氣を治むるを曰ふ。房中の導氣運行

二に沫を致すを曰ふ。服食時の舌下津液

三に時を智(知)るを曰ふ。交合の最適時を知る

四に氣を奮^めつるを曰ふ。 蓄養精氣

五に沫を和^めすを曰ふ。 男女双方相親、吻而吸其津液※

六に氣を竊^めむく^め聚める^めを曰ふ。 氣を聚める

七に贏^み盈^みつるに寺^た(待)むを曰ふ。 氣を保持盈滿する

八に定傾^め定傾^め安定^めを曰ふ。 能く安定を得る

〔馬王堆醫書考注・天津科學技術出版〕

※ 「醫心方」卷二十八・和志第四(8-10) 洞玄子曰……初交會之時、男

坐(坐)女左(左)、女坐男右、乃男箕坐^{みぞ}(兩足を投げ出して坐る)、抱女於

(於)懷中、於是勒^{ひきよせる}織^め(^め織、^めほそい)腰、撫玉體、申^{やすらかなうつくしい}嫵^め婉、叙^{のべる}

綢繆^{ちゆうひゆう}(深い友情)。同心同意、乍抱乍勒、二形相搏、両口相嚙^{感激を口}

にする。男含女下脣、女含男上脣、一時相吮、茹其津液、或(或)緩

齧其舌、或^{うかがう}微^め其脣、或^{むかえる}邀^め遣抱頭、或^{ちかづいてもらいる}逼^め命指耳。撫上拍下嚙。

東庚西干……既申百慮竟辭。乃令女左手、把(把)男玉莖(莖)、男

以右手撫女玉門。於是男感陰(陰)氣則玉莖振動。其狀也哨然上聳若

孤峯之臨迥(廻)漢、女感陽氣……………

七孫(損)とは、一に閉を曰ふ。 精道の閉塞不通

二に泄を曰ふ。 男精の早泄

三に渴(竭)を曰ふ。 精氣の短竭

四に勿^{ぶつ}を曰ふ。

陽萎不举

五に煩を曰ふ。

交媾時の煩心不安

六に絶を曰ふ。

男方強行交合、而損心身健康※

七に費を曰ふ。

交合時過於急速圖快、徒然耗費精力

〔馬王堆醫書考注・天津科学技術出版〕

※ 「醫心方」卷二十八・和志第四 玉房秘訣(訣)云(云々)、・・・黄帝曰、

今欲(欲) 強(強)交接、玉莖不起、面^{ほすかしい} 慙^{ほすかしい} 意^{ほすかしい} 羞、汗如珠子、心

情貪欲(欲)、強(強)助以手、何以強(強)之、願聞其道。素女曰、

帝之所(所)問、衆人所(所)有。凡(凡)欲接女、固^{もとより}有經(經)紀(紀)、

必先和氣、玉莖乃起・・・

このように七損八益＝房中術は正經中では、いくぶん襟を正した上品な姿で現されているが、医心方に引かれる道士の文章には、まさに房色についての赤裸々な言及がなされている。我々は、こうしたバックグラウンドが隠されていないか、つねに考えながら黄帝内經の世界に親しんでゆく必要があるのではないだろうか。

余談だが、森鷗外『澀江抽齋』には、「海保漁村の(撰んだ抽齋の)墓誌に七損八益を説くに、玉房秘訣を引いて説いたことが載せてある」とあり、澀江抽齋もこの玉房秘訣を、このような視点で読んでいたことが証される。

「医心方」は慶應大学メディアセンター公開の抄本より。